

岩手県野田村の支援・交流活動報告（2012年 9月 29日）

台風北上中で、あいにくの小雨。今回は、いつもの学習支援・子供との交流活動に加えて、蕎麦の収穫、個人宅の砂利敷き、実施中の野田村復興応援フィールドツアー補助という4つの活動を行いました。農作業が含まれていたためか、一般参加者が多く、現地で合流した人を含めて、一般16名、学生9名、教員2名の計27名の参加がありました。



雨天



「おりつめ」で集合写真

定時通り、7時過ぎに出発し、10時30分前に野田村役場前「のんちゃん広場」に到着。学習支援グループは総合センターへ、砂利敷きグループは個人宅へ、蕎麦収穫とフィールドツアー補助グループは「かまどのつきや」へと、それぞれ向かいました。



砂利敷きグループ出発



蕎麦収穫グループ出発

蕎麦収穫グループは、「かまどのつきや」から徒歩で蕎麦畑へ移動。雨具を身にまとい、軍手をはめ、人により鎌を借りて、一面に広がる蕎麦を切り取る作業にかかりました。地元の方と農作業経験のあるボランティアに、蕎麦の摘み方と藁でのまとめ方を教わって、作業は次第にスムーズに進行していきました。老若男女のボランティア同士、語りあ楽しむ様子は、さながら農業体験のよう。昼までに、収穫した蕎麦の山が積み上がりました。



蕎麦の収穫



蕎麦を藁で束ねる

昼食は「かまどのつきや」でお弁当。フィールドツアーで訪問中の大阪大学と八戸高専の学生もいらしていました。野田塩おにぎり、地元の野菜、漬け物やお茶を、広々とした畳の上で美味しくいただきました。学習支援グループと砂利敷きグループも合流。学習支援では、女子学生が子どもとお話しながら勉強を見たのに対し、男子学生は男の子に肩車をせがまれたそうでやや疲れた様子でした。砂利敷き作業もなかなかハードだった模様。



前日入りの卒業生・南部君の発声



「いただきます」

午後は、グループごとに持ち場に戻り、ボランティア活動を継続。蕎麦収穫グループの一部は、フィールドツアーの補助（水車のもちつき体験や調理のサポート）に回りました。学習支援グループでは、男子学生が足りず、子どもの求めに応じて女子学生も肩車をしたそうです。砂利敷きグループは、作業終了後、蕎麦収穫に回りました。蕎麦畑では、一緒に作業していた地元の方からつらい心境が語られる場面もあったとのこと。15時前には、かなりの面積の蕎麦が刈り取られていました。その後、おやつ代わりに、フィールドツアー参加者に振る舞われた「鶏卵」（卵型の餡子入りお餅）のおすそ分けを受けました。



調理サポート



蕎麦収穫後の畑

あいにくの天候でしたが、小雨で済み、事故なく、無事に活動を終えることができました。帰りのバス車中の活動感想タイムでは、学習支援について、子どもが元気だった、話しかけてくれた、子どもの色々な面を見る余裕ができた、継続して参加したい、などの声が聞かれました。蕎麦収穫も、楽しかった、良い体験ができた、グリーンツーリズムに参加したようだった、など好評でした。砂利敷きでは、大変で疲れたがやりがいを感じた、体力を使う作業が良かった、などの感想がありました。フィールドツアー補助では、親戚と一緒にお客さん（ツアー参加学生）を迎えている感じで、弘前からのボランティアを「手伝ってくれる人たち」と見てくれる感じで嬉しかった、という声などがありました。

他方、仮設住宅を回り行事を行ってはどうかという提案や、被災された方と関わる機会が少なかった、被災者の役に立てたのか、という疑問も出されました。これらに対して、ご家族で参加した李先生は、仮設住宅集会場に挑戦したいが鍵の受け渡しや場所取りが難しい状況にある、今回は被災者の顔の見えない活動だったが地域の経済を支える人たちにサポートするかたちでの貢献だった、グリーンツーリズムのように野田村に足を運ぶきっかけ作りとして長いスパンでの野田村の復興につながるのではないか、と応答しました。

チーム・オール弘前のボランティアは、がれき撤去や支援物資の整理から始まり、県外ボランティア受け入れ停止後、支援から交流へ軸を移して活動を続けてきました。復興に向かう過渡期の野田村の支援・交流のかじ取りには困難を伴いますが、今後も野田の人たちと併走しながら、震災からの復旧と村おこしに協力することができれば幸いです。

10月1日の弘前大学ボランティアセンター昇格を受けて、今回は、人文学部ボランティアセンターとして最後の活動日となりました。改組後も、弘前市民と学生の助力を得て、センターの原点である野田村災害ボランティアの取り組みを継続していく予定です。

(担当：飯考行)